

はくさん

第46巻 第1号

目次

P 1
南からやってくる鳥たち

P 2
中宮展示館周辺の自然

平松 新一
南出 洋
安田 雅美

P 7
市ノ瀬ビジターセンター周辺の自然

八神 徳彦
甲部 芳彦
後藤 理子
谷野 一道

P12
白山の登山道に思いを寄せて

乾 靖

P16
センターの動き



南からやってくる鳥たち

春になると南西諸島や東南アジアから多様な種の鳥たちが渡ってきます。白山麓では、3月下旬になるとタカの仲間であるサシバが「ピックイー」と元気に鳴く声が聞こえるようになります。4月になると次々と顔ぶれが増えていき、4月下旬の中宮展示館周辺では、ヒタキの仲間のオオルリやキビタキなどが美しい声でさえずり、カッコウの仲間のツツドリが「ポポッ、ポポッ」と不思議な声で鳴いています。5月になると、アカショウビンの「キョロロロロ」という独特な声が聞こえてきます。市ノ瀬ビジターセンターからチブリ尾根に登っていく途中では、コルリの「ヒッヒッヒッ、ピーチョロピーチョロピー」をはじめ、様々なさえずりが聞こえてきます。長い旅を乗り越えて命をつなぐ鳥たちの声が、この先も白山麓の森に響き続けるようにしていきたいですね。

<写真 左上：サシバ、右上：キビタキ、左下：コルリ、右下：アカショウビン>

(近藤 崇・安田雅美)

中宮展示館周辺の自然

平松 新一・南出 洋・安田 雅美（白山自然保護センター）

はじめに

^{ちゅうぐう}中宮展示館（写真1）は白山市中宮、白山白川郷ホワイトロード中宮料金所手前にある施設です。館内は白山の自然や文化について、本物の動物の毛皮や角に触れたり、虫や鳥の声を聞いたり、昔の暮らしの様子を見たりして、実際に体験しながら学べるように展示されています。開館期間は積雪の残り具合と白山白川郷ホワイトロードの無料区間開通時期に左右されますが、ここ数年は4月下旬から11月中旬までです。

館内だけでなく、周辺には観察路や園地が整備されており（図1）、白山麓の季節ごとの自然を身近に体験できます。では、その中宮展示館周辺の自然について紹介しましょう。

展示館前庭

展示館の前には芝生が広がっており、ベンチに腰掛けて休憩したり、昼食をとったりしながらピクニック気分での周りの景色を楽しむことができます。芝生にあるシロツメクサやハルジオン、ヒメジョオンの花には、モンシロチョウやモンキチョウなどが飛来し、7月初めには石川県の絶滅危惧Ⅱ類であるヒメシジミ（写真2）がやってくることもあります。また、ブナやコナラの木々にはシジュウカラ、ヤマガラ（写真3）、メジロ、コゲラの他、秋にはアトリが訪れます。



図1 中宮展示館周辺地図



写真2 ヒメシジミ



写真3 ヤマガラ

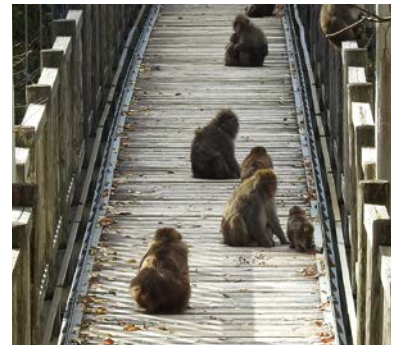


写真4 ニホンザル



写真5 イヌワシ



写真6 オトシブミのゆりかご



写真7 ルイスアシナガオトシブミ

ニホンザルも展示館の前に姿をよく見せ、多い時には10頭以上の群れがやってくることもあります(写真4)。背中やおなかに子どもを乗せたお母さんザルもいますし、お母さんから離れたかわいい子どもたちもみられます。ただ、かわいいばかりではなく、最近は人に慣れて、近づいても逃げない場合もあります。サルには絶対に餌をあたえないでください。ますます人間を怖がらなくなって、しまいには人が持っている食べ物を奪いに来るようになることもあるからです。

上空を見上げるとイヌワシが飛んでいることもあります(写真5)。イヌワシは羽を広げると2mにもなる大型の鳥で、空を悠々と飛ぶ様子は多くの野鳥ファンを魅了しています。中宮では1年を通してみられ、時には2羽が飛び交っていることもあります。

玄関前のケヤキの木の下には、5月中旬になると、写真6のように葉っぱを丸めたものがたくさん落ちるようになります。これはオトシブミが作ったゆりかご(揺籃)です。オトシブミは、1cmにも満たない小さな昆虫ですが、葉を切って、噛んで折り目を付けて、折り曲げ丸めて、ちょっとやさつとではくずれないしっかりしたゆりかごを作り、その中に1つだけ卵を産みます。葉の中で孵った幼虫は、この葉だけを食べて大きくなり、その中でさなぎを経て成虫になるのです。オトシブミは種ごとにゆりかごを作る葉が違って、このケヤキの葉でゆりかごを作っているのは、ルイスアシナガオトシブミ(写真7)という種類です。

前庭の左右には駐車場があり、その周りにも様々な生き物が見られます。6月に側溝で「コココッ、…」と鳴いているのはモリアオガエルです。夏にはクサギの花にミヤマカラスアゲハをはじめ多くの昆虫が訪れています。ミヤマハハソという木には、スミナガシやアオバセリというチョウが産卵します。その葉を食べて育つスミナガシは、幼虫やさなぎが面白い姿をしています。小さい幼虫は葉の真ん中の脈を残して食べ、その脈にいる様子はまるで枯れた葉のようです(写真8)。幼虫が大きくなると2本の長い角を持つようになり、その姿はまるでランプの「ジョーカー」の仮面をつけているようです(写真9)。さらに、さなぎも枯れ葉に似せた独特な形をしており、木の枝にぶら下がっている様子は枯葉と見分けが付きません(写真10)。

じゃ だに 蛇 谷

中宮展示館前には白山の雪解け水を集めた清流、蛇谷の川が流れています。その水は1年中冷たく、



写真8 スミナガシ若齢幼虫



写真9 スミナガシ終齢幼虫



写真10 スミナガシさなぎ

夏休みには川遊びなどに来る多くの人々でにぎわいます(写真11)。

川にはイワナやカジカなど、冷たい清流を好む魚が生息しています。このうちカジカ(写真12)は石川県ではゴリと呼ばれ、石や砂のある川底にすんでいて、展示館前の流れでも多く見られます。カジカガエル、ナガレヒキガエル、ナガレタゴガエルなどの流れのある場所を好むカエルも見られます。特にカジカガエル(写真13)は、6月から7月の繁殖期には川の石の上に出て「フィフィフィフィー…」という美しい声で鳴いています。

黒っぽいからだの鳥が川の流れの中を歩いていることがあります。この鳥はカワガラス(写真14)で、強い握力で川底の石をつかみ、流れの中を移動しながら水生昆虫や小動物を捕食しています。川を歩いている様子は空を飛ぶ鳥とは思えないユニークな姿です。

カエルや鳥だけでなく、虫たちも見られます。夏の河原には胴体が青く輝き、羽が茶色で半透明の美しいミヤマカワトンボ(写真15)が飛んでいます。オニヤンマなどのように速く飛ぶことはなく、緩やかにひらひらと飛んでいたり、河原の石や木の枝に止まったりしています。この他にも、川底の石をめくると、その裏にはカワゲラやトビケラなどの水生昆虫がいることがあります。中宮展示館では川底の様子を観察できる箱めがねや観察用に網を貸し出しています(持ち帰りは不可)。これらを使って、川の生き物の様子をぜひ観察してみましょう。

夏は楽しい蛇谷ですが、8月に入るとこの地域ではイヨシロオビアブ(写真16)が現れます。この辺りでは「オロ」「オロロ」「ウルリ」と呼ばれている吸血性のアブで、大きさは1cmくらい、からだのまん中あたりにある白い帯が特徴です。このアブは特に溪流沿いに生息しているため、蛇谷でも多く発生しています。カのように皮膚を刺して吸血するのではなく、鋭い口器で皮膚を切り裂いてその血をなめとります。吸血された部位はひどく痛み、放っておくと腫れが大きくなり、しばらくの間かゆみが続きます。河原に下りるとどこからともなくこのアブが集まってきて、隙あらば吸血してくるので、この時期に川に行く場合は注意が必要です。



写真11 夏の蛇谷



写真12 カジカ



写真 13 カジカガエル



写真 14 カワガラス



写真 15 ミヤマカワトンボ

蛇谷自然観察路

中宮展示館裏には蛇谷自然観察路があります。そこでは2つの観察路が整備されており、歩きながら季節ごとの自然を楽しむことができます(図1)。猿ヶ浄土コースは全長約1,200m、標高差約130m、ゆっくり歩いて約1時間30分、ブナ平コースは全長約1,100m、標高差約100m、ゆっくり歩いて約1時間です。どちらのコースも季節ごとにさまざまな花や生き物たちが皆さんを歓迎してくれます。高低差がありますので、散策される方は、軽い山歩きの格好で来られるといいでしょう。



写真 16 イヨシロオビアブ

観察路最大の見どころは、春の開館直後のカタクリの大群生です(写真17)。カタクリはほぼコース全体にあり、時期によってはカタクリのピンクのじゅうたんの中を歩いているような錯覚に陥るほど満開の花々が迎えてくれます。場所ごとに開花している時期が違っているので、ゴールデンウィーク中はコース内のどこかで満開のカタクリを見ることができでしょう。しかし、そんなに咲き誇っていたカタクリは連休明けには花が終わり、さらにその後ひと月もすると葉も枯れてしまい、最後には観察路のどこにカタクリがあったのかさえ分からなくなってしまいます。そんなことから、カタクリは春のはかなさを象徴する「春の妖精(スプリング・エフェメラル)」とも呼ばれています。

カタクリが終わるとニリンソウの白い可憐な花(写真18)が観察路のあちこちで見られるようになります。ニリンソウは名前の通り1本の茎から二輪の花茎が出る場合が多いのですが、一輪や三輪が出ていることも珍しくはありません。また、観察路では花卉が緑色のニリンソウが出てくることもあります。花茎が三輪のものや緑色の花卉のものを探してみるのも楽しいでしょう。



写真 17 カタクリ



写真 18 ニリンソウ



写真 19 アカショウビン



写真 20 マムシ



写真 21 ヤマカガシ

秋の紅葉も見事です。ブナの黄色やモミジ、ウルシの赤など色とりどりの紅葉が楽しめます。猿ヶ浄土コースの尾根から見る山々の紅葉は天国に来たかと思うくらい壮観です。

これらのほかにも、6月のハクウンボクの真っ白な花、夏のエゾアジサイ、クサギ、キンミズヒキ、秋のノコンギク、オヤマボクチ、ツリフネソウなど、季節ごとに様々な花がみなさんを待っています。

鳥たちもよく見られます。特に木々が芽吹き始める春から初夏は、葉の緑も淡い上に、鳥たちの繁殖の時期でもありさまざまな鳥が観察できます。美しい声でさえずるキビタキ、オオルリはその代表です。葉の緑が濃くなる5月下旬には林の中から「キョロロロー」というよく通る鳴き声が聞こえるようになります。声の主はアカショウビンという鳥（写真19）で、名前の通り全身が赤い色をしています。朝夕によく鳴いており、曇った日には日中でもよく鳴いていますが、なかなかその姿を見せることはありません。鳴き声ではありませんが、観察路を歩いていると、「ドドドド…」と連続して木をたたいているような音が聞こえます。これはキツツキたちがくちばしで木をたたいている音です。中宮にはアオゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラなどのキツツキがいて、コゲラは中宮展示館前に出てくることも多いのですが、その他のキツツキは主に森の中で生活しています。

観察路には樹液の出ているコナラの木があり、夏には、虫たちのレストランになります。ミヤマクワガタ、コクワガタ、カブトムシ、カナブンなどのコウチュウをはじめ、ヤマキマダラヒカゲ、クロヒカゲ、ルリタテハなどのチョウがたくさん樹液に集まってきています。ただし、スズメバチ類も来ていることが多いので、気を付けて観察してください。

「蛇谷」と名前がついているくらいですから、この地域にはヘビやトカゲ類が多く生息しています。毒蛇であるマムシ(写真20)やヤマカガシ(写真21)も時々見られます。マムシは全長50cmくらいで、三角形の頭と太い胴、銭形の模様が特徴です。ヤマカガシは大きくなると全長が1mを超すこともあるマムシよりも大きな種類です。体色は地域差があり、この地域ではオリーブ色から褐色のからだに赤い斑紋のある個体が多いようです。どちらも比較のおとなしい種類ですから、出会っても刺激せず、静かに通り過ぎましょう。

おわりに

中宮展示館周辺のさまざまな自然や生き物について紹介してきました。中宮には、これ以外にもここで紹介しきれなかった、たくさんの生き物がいます。土、日、祝日には白山自然ガイドボランティアの皆さんによるガイドウォークも行っています。ガイドの解説を聞きながら観察路を散策すれば、白山麓の自然をさらに深く知り、心も体もリフレッシュできること間違いなしです。また、中宮展示館では4月下旬から5月上旬、7月下旬、10月中旬には「楽しもう！白山ろく days」と称して、季節に応じた中宮の自然を紹介する催しを行っています。ぜひ中宮展示館においでいただき、白山麓の自然を楽しんでください。

市ノ瀬ビジターセンター周辺の自然

八神 徳彦・甲部 芳彦・後藤 理子（白山自然保護センター）・谷野 一道※

はじめに

市ノ瀬ビジターセンターは平成4年5月に設置された国設白山鳥獣保護管理センター（市ノ瀬ステーション）として始まり、平成12年6月に自然公園核心地域総合整備事業（緑のダイヤモンド計画事業）の一環として新たに整備されました。さらに、開館から10年以上が経過し、国内外を含む幅広い利用者への対応や、白山の魅力をより発信していくために、平成24年度に展示改修が行われ、国土交通省のライブカメラ映像を利用した白山のリアルタイムの状況の映像のほか、白山の登山情報や、市ノ瀬周辺の自然情報を伝えるための機能が強化されました。この施設は環境省の建物や展示物、備品を、管理業務を委託された石川県が運営しています。

目的と役割は、白山国立公園利用者への登山情報の提供と登山者への指導を行うこと、及び白山の自然情報を提供することにより安全で快適な登山を楽しんでもらえるようにすること、また、周辺の観察路などで実施する自然解説活動を通して白山の魅力を伝えることで、白山の自然のすばらしさ、大切さについて理解してもらうことです。開館は4月下旬から11月上旬までですが、道路の開通状況などにより変更されることもあります。

市ノ瀬周辺は古くより白山の登山口としてにぎわい、白山（越前）禅定道の登拝拠点となっていました。昭和9年の大洪水により集落の多くが土石流に埋まってしまいました。その後、砂防工事や登山道の整備とともに、現在の市ノ瀬の施設ができています。



写真1 市ノ瀬ビジターセンターの外観

建物や展示の概要

建物は2階建て、外観は山小屋風で周囲の自然にとけこむ雰囲気となっています（写真1）。玄関から階段を下りた1階はレクチャーホールがあり自然ガイドの講義などに使われています。また、2階は白山登山に関する情報、白山や市ノ瀬周辺の自然情報を案内するコーナー、白山国立公園マップ、白山の各種映像コーナー、木工作など楽しめるコーナー、自然や山に関する図書などが設置されてお



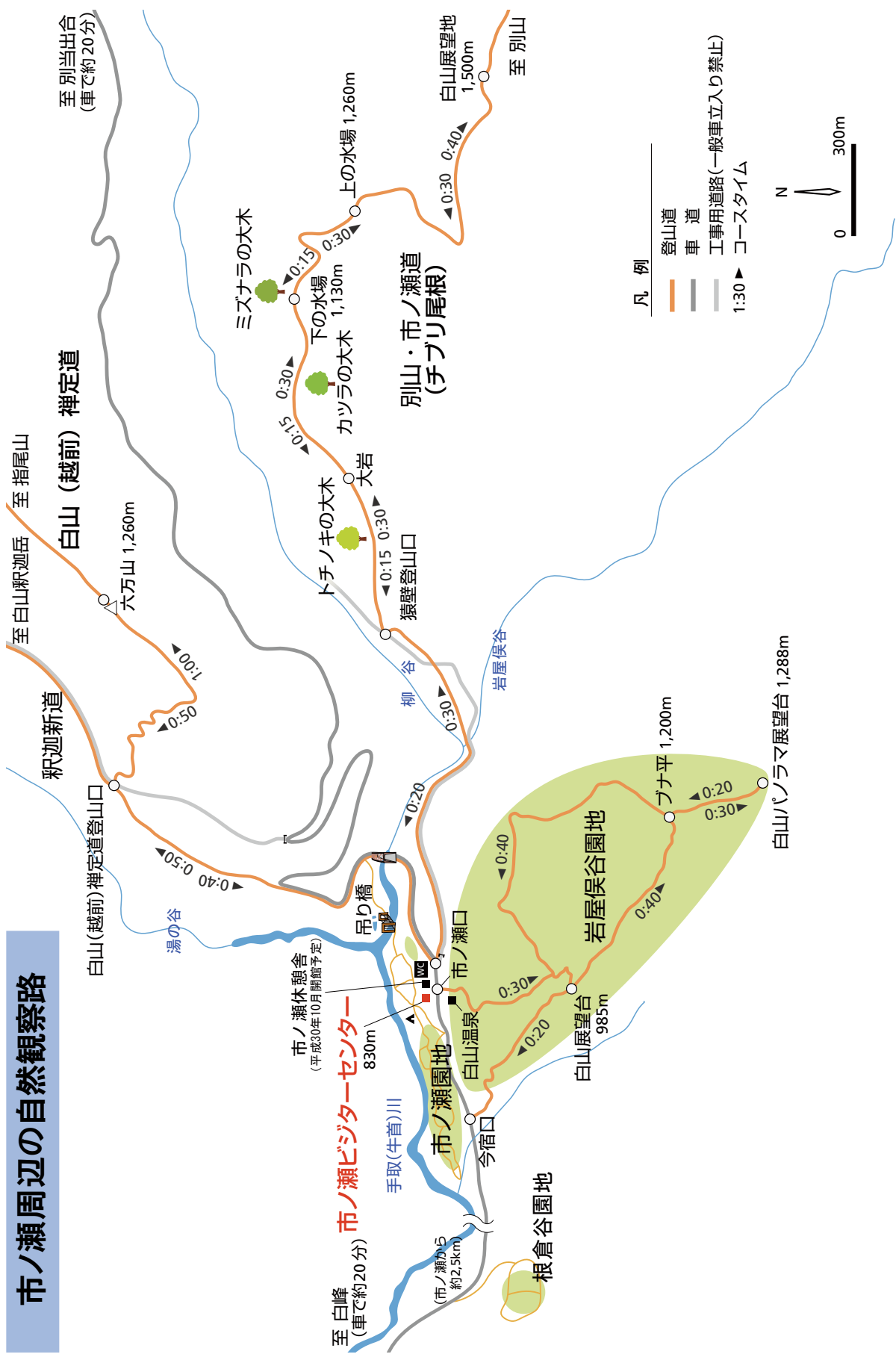
写真2 ビジターセンター内部の展示



写真3 ガイドウォーク

※元白山自然保護センター職員

市ノ瀬周辺の自然観察路



り自由に利用することができます（写真2）。

ビジターセンターの周辺にはいくつかの自然観察路があり、「白山登山はちょっと無理だけど山の自然に触れたい」という方に絶好の散策コースとなっています。また、開館期間の土・日・祝日には白山自然ガイドボランティアの皆さんの協力を得て、観察路のガイドウォークを無料で行っており、ガイドボランティアさんと一緒に散策し、自然の中で新たな発見をして多くの方に喜んでいただいています（写真3）。自然観察路はバリエーションに富んでおり、体力や時間、興味に応じてガイドボランティアさんと相談して決めることができます。それでは自然観察路の見どころについてご紹介します。コースタイムを参考として記載していますが、これは普通に歩くのに必要な時間で、自然をゆっくり観察して歩く場合は2倍以上の時間となりますので十分時間に余裕をもってお出かけください。

市ノ瀬園地

ビジターセンターの川側にあります。ビジターセンターに一番近く一周約30分と気軽に散策できるコースです（写真4）。手取川（牛首川）に注ぎ込む溪流沿いに木道が設置されており、溪流のせせらぎと木立を抜ける涼風を感じ、水辺の植物を観察することができます。時には流れの中にイワナの姿を見ることがもできます。河原には、ごろごろと大きな岩が重なり自然の力強さを感じることができ、中には爪痕つめあとのような模様がいくつも付いた石も見られます。これは貝の化石で「爪石つめいし」とも呼ばれ、この地域が大昔は水辺だったことを知ることができます。そしてこのコースの一番のお勧めは、早春の河原から見る清流とドロノキの新緑、その背後にみえる残雪の山々です（写真5）。初夏にはエゾハルゼミの大合唱が響き渡り、夏の訪れを感じさせてくれます。8月中旬から10月初旬の晴れた日にはドロノキの実の白い綿毛が青空を背景に雪のように舞い飛び市ノ瀬の秋の風物詩となっています。



写真4 市ノ瀬園地



写真5 早春のドロノキと清流

岩屋俣谷園地

ビジターセンターの向かいの山を周遊するコースで、一周約1時間の白山展望台コースと一周約3時間のパノラマ展望台コースがあります。永井旅館の裏側を登っていくと祠ほこらがあり、炭窯すみがまのあとも見られます。市ノ瀬には以前、集落があり、コース沿いに残るオニグルミやクリの大木は実をとるために伐採されずに残されたものでしょう。やがて道は二つに分かれ右に向かうと白山展望台（標高985m）に到着します。ここには休憩舎があり白山山頂部と釈迦岳を望むことができます（写真6）。帰りは来た道を戻ってもいいですし、今宿口いまじゆくぐちに下ることもできます。所要時間約1時間程度ですので、軽く山を歩くにはちょうど良いコースです。



写真6 白山展望台

白山展望台に向かう途中の分岐を左に向かうか、白山展望台まで来てそこからさらに上に向かうとやがてブナの森が広がってきます。ブナ平（標高 1,200m）といい、特に春の新緑と秋の紅葉は見事です（写真7）。しかし春早い時期ですとまだ残雪が多く、慣れない人には危険ですのでビジターセンターの職員に状況を聞いてから登ってください。市ノ瀬から約2時間でパノラマ展望台（標高 1,288m）に到着します。ここには休憩舎はありませんが、ブナの森の奥に広がる別山から白山山頂部、四塚山までを間近に望むことができます（写真8）。春にはオオルリやキビタキの囀りや、イワウチワ、サンカヨウなどの花を見ることがもできます。パノラマ展望台コースは往復で約3時間かかりますので、初めての方はガイドボランティアさんと登ることをお勧めします。



写真7 ブナ平



写真8 パノラマ展望台

根倉谷園地

市ノ瀬の手前約1kmの県道沿いにある湿原です。以前は、白山麓独特の「出作り」生活が行われ、湿原は田んぼとして利用されていました。湿原周囲の木道は一周約15分で、湿原の植物やトンボなどが観察できます。一番の見どころはミズバショウで、一面に咲く純白の花（総苞）が見事ですが、最盛期は例年4月の下旬で、市ノ瀬まで道路が開通するころにはピークを過ぎていることが多いです（写真9）。それでも、5月初旬でしたらまだ見ることができるので、ぜひ立ち寄ってみてください。秋にはアケボノソウ、エゾリンドウなどの花を見ることができます。



写真9 根倉谷園地のミズバショウ

釈迦新道方面



写真10 釈迦新道道路沿いのブナ林

市ノ瀬の駐車場の先にある吊り橋を渡り、車道を進むと、釈迦新道、白山禅定道登山口の看板があり、ここからしばらくスギ林内の平坦な道を歩きます。岩の多い斜面を登っていくと白山禅定道との分岐となる工事用道路と合流するので、この道路を歩きます。道路はブナ、トチノキ、サワグルミなどの大きな森の中を通るので、春、夏、秋と違った姿を見せてくれます。一般車両は侵入できません。また、平成30年6月現在、釈迦岳登山口手前の湯の谷橋付近での大規模な土砂崩れにより、橋が土砂で埋まり、渡れません。ここより先は大変危険なので手前で引き返してください。

白山（越前）禅定道（六万山、指尾）方面

釈迦新道との分岐で工事用道路を横断する形で六万山（標高 1,260m）（写真 11）に向かいます。白山（越前）禅定道は福井県の平泉寺白山神社から山頂まで続くかつての登拝道で、市ノ瀬から六万山、指尾、慶松平への道は平成 11 年に白山禅定道として復元されました。指尾（標高 1,417m）からは大汝峰から御前峰、別山までを一望できますが、市ノ瀬から片道で 3 時間かかりますし、急な岩場なので自然観察で行くのであれば六万山手前で引き返したほうがいいでしょう。

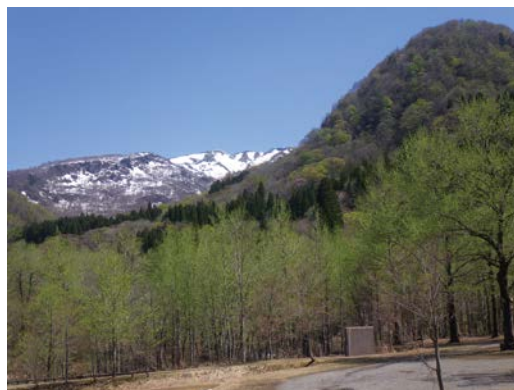


写真 11 六万山（手前右）

別山・市ノ瀬道（チブリ尾根）方面

別山に通じるチブリ尾根までの工事作業道とそれと並列してある登山道を散策します。道沿いの岩壁には冷たい水が滴り、ダイモンジソウやクジャクシダなどを見ることができます。岩屋俣谷川沿いのミズナラ、ドロノキなどの森の中には初夏にツルアジサイやイワガラミが木々にからまり、真っ白な花（萼片）を咲かせます。猿壁堰堤はチブリ尾根の登山口になっており市ノ瀬から 30 分ほどかかります。チブリ尾根の登山道は白山でも有数のブナの原生林が広がります。登山口からすぐトチノキやカツラの大木を仰ぎ見ながら進みます。しばらく行くとブナ林が広がりはじめ、秋には落ち葉のじゅうたんを楽しむことができます。猿壁登山口から 1 時間 20 分ほどで水場につき、標高 1,500m ほどになると別当出合から主峰御前峰までが一望できます。この先、チブリ尾根避難小屋、御舍利山、別山と続きますが、自然観察を楽しむ散策なら一日かけても水場あたりで引き返すのがよいでしょう。



写真 12 チブリ尾根の大カツラ

白山登山の玄関

多くの白山登山者が市ノ瀬を登山拠点としています。平成 29 年は白山開山 1300 年の節目を迎え、室堂・南竜馬ヶ場の宿泊者数は約 28,000 人となりました。白山では、安全な登山のために平成 29 年 7 月 1 日から登山計画書（登山届）の提出が義務化されています。市ノ瀬を起点とする登山に際しては市ノ瀬ビジターセンターか別当出合休憩舎にある登山届ポストに登山届を提出してください。

白山自然保護センターでは、白山の施設・登山道の状況についてホームページ上で情報を提供しています。この情報は地元関係機関や登山者からの情報をもとに作成されており、市ノ瀬ビジターセンターは、登山情報の交流の場所としても重要な役割を果たしています。7 月上旬から 10 月中旬までの土・日・祝日の登山ピーク時には、交通規制を実施します。規制中は、シャトルバスが市ノ瀬から別当出合までピストン運行されます。市ノ瀬ビジターセンターは登山の準備をし、また下山して休憩する場所としても利用されています。今年 10 月には、ビジターセンター横に新しく市ノ瀬休憩舎が完成する予定で、より多くの登山者の方が憩うことができるようになります。金沢から車で約 1 時間 30 分。白山登山、自然観察、そして何もせずに山を眺め涼風に吹かれる一日。人それぞれの楽しみ方がある市ノ瀬の自然。市ノ瀬ビジターセンターはこれからもそんな皆さんのお手伝いをしていきたいと思っています。

白山の登山道に思いを寄せて

乾 靖 (株オフィス・イヌイ)

白山登山の魅力

石川、福井、岐阜、富山の4県にまたがる白山国立公園は昭和37年に国立公園に指定され、豊かな自然環境は多くの来訪者にその魅力を伝えています。豊富な雪に覆われた白山上部は、裾野を広げる周辺地域の大切な水源となっており、日本海側に注ぐ手取川、九頭竜川、庄川と太平洋側に注ぐ長良川の流域は、知らず知らずにその恩恵を受けている訳です。

さて、日本では古来より「高嶺には神が宿る」という考え方があります。山岳信仰が仏教と融合し発展する際に山を御神体と考え、全国の山々には「大日」「薬師」「釈迦」などと御仏の名を冠して名付けられた峰々が多く有ります。一方、美しい高山植物が咲き乱れる所を極楽の世界に例えて「弥陀ヶ原」や「清浄ヶ原」、グツグツと温泉やガスの噴出しているところを「地獄谷」と呼ぶ例もあります。

白山も、「越のしらやま」と呼ばれ信仰の対象として崇められて来ましたが、同様な名称が多く存在します。登山口から山頂のご本尊にたどり着くまでに地獄や極楽を垣間見て、ついには禅定を成すという登山体験は、まさに山あり谷ありという人生そのものをなぞらえているようで、今も昔も山は自然のテーマパークとして人を引きつけ続けています。

天高く突き上げる遥かな主峰を仰ぎ見る時、山に登って一面に咲き乱れる花畑を眺めた時、何とも清廉な



別山平の^{ぜんてい}禅庭花 (ニッコウキスゲ)

心境になるのは、恐らく私たちのDNAに組み込まれた精神作用なのであろうと思います。川は流れて大海に注ぎ、雲を結びて高嶺に舞い戻るといった大きな自然浄化サイクルは輪廻転生の^{おし}訓えとも重なり、山歩きをしながら白山の成り立ちに思いを巡らせるのも一興です。

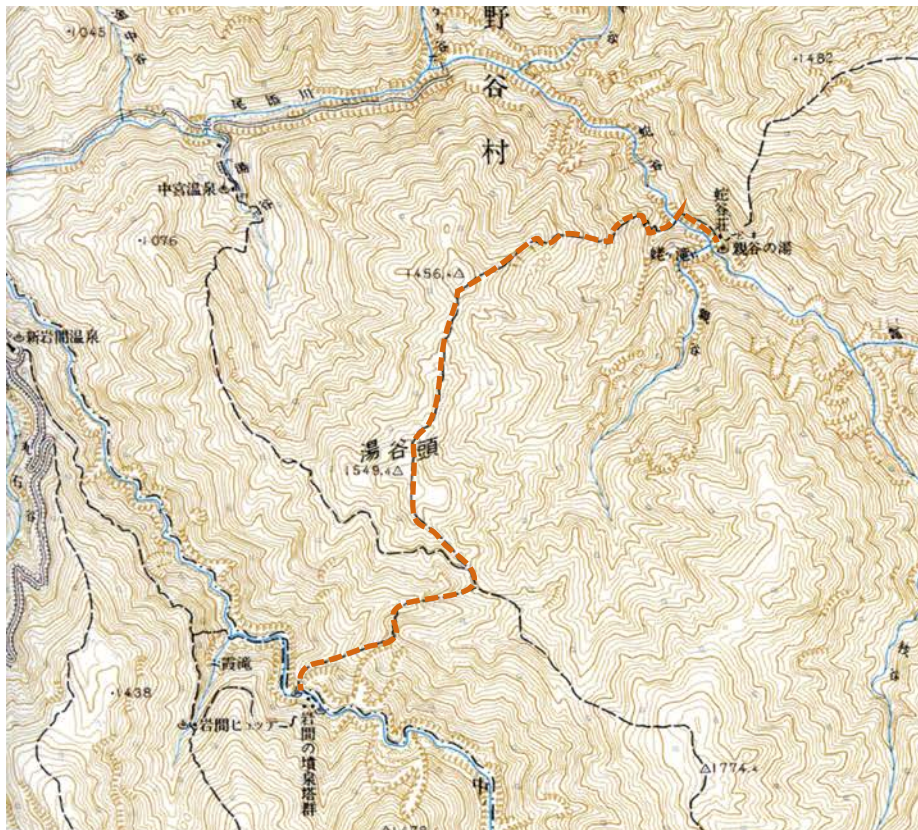
消えた登山道

昭和40年代の市販の登山地図を見ると現在は使われていない様々なルートが描かれていて興味深く思います。例えば現在通行止めになっている国指定特別天然記念物の岩間噴泉塔群から中ノ川を渡り、中宮道湯谷頭に向けて急な尾根を登り上げ、今度は蛇谷にある親谷の湯に向かって細く険しい尾根を行くルートがありました。現在は廃道になっていますが、今でもその当時の道標がひっそりと残っており、標識には「湯谷ノ頭 噴泉塔 3.2KM 蛇谷 4.2KM」と刻まれた文字がはっきりと読み取れます。丸柱に



湯谷頭に今も残る標識

「湯谷ノ頭 噴泉塔 3.2KM 蛇谷 4.2KM」と記されている。



古い地形図に示されたかつての登山道

(国土地理院5万分の1地形図「白川村」、昭和46年10月30日発行を使用)

標識板がかすがいで打ち付けられたこの時代の標柱も懐かしいもので、北部白山エリアでは未だに残っている場所もあります。

この他、大汝峰から湯の谷に向かって湯の谷川を渡り釈迦新道につながる湯の谷新道(通称ワングル新道)が拓かれ、釈迦新道宮谷川源頭部の鞍部・湯の谷乗越からシゲジ→鳴谷山→砂御前山→青柳山を経て白峰に至る約14kmに及ぶ青柳新道がありました。今は廃道になっていますが、残雪期に歩いた経験があります。普段目にする事の無い滝や違う角度からの主峰の眺めなど興味深いもので



シゲジから白山主峰の眺め(人物は筆者)

した。この他にもさまざまな登山道は拓かれては消えて行き、現在の姿になっているのです。

昔の地図と比べると登山道上の地名やピークの名前がどんどん消えているのは残念な事です。近年はGPSを片手に歩くことが多くなり特定の場所を呼び名で共有しなくとも、緯度経度の数値で特定できるようになった弊害でしょうか。実に寂しい限りです。

現在岩間噴泉塔への登山道は各所に崩落などがあり閉鎖されている状況です。また岩間道も岩間休憩舎に至る道路山側の斜面の大崩落により3年間通行止めとなっています。登山道はいくら草刈しても歩く人がいなくなればすぐに荒れ果ててしまいます。草刈をただけでは登山道は安定しません。登山道はあくまでも登山者のためのものであり、必要がなくなれば廃道となるのは必然の事なのです。

登山道は人間だけのものではない？

登山道は、本当は人間だけのものでもないのです。クマやカモシカも登山道で移動できるなら歩

きやすい道の方が楽なので、移動には登山道も利用しています。ある時草刈作業を終えての帰り道、私は刈ったばかりの草の上に大きなクマの糞を3か所で見つけました。さらに歩いてつづら折りの急坂を登り登山道脇の花畑を見下ろすと、最大級のクマが花畑にいました。登山道からハイマツで遮られ隣接した花畑のクマは、脇を歩いている私からは見えませんでした。素知らぬ顔で果実をむさぼっていたのです。草刈した直後の登山道の利用者はそのクマだった訳です。少し距離もありこちらが上にいたので、「オーイオイ」と声を掛けると大きな頭を上げて私を見つめていましたが、草刈ご苦労さんとは言っていませんでした。そのクマの写真を撮り荷物を担いで振り向いた瞬間、10 m先のハイマツに黒い物体がバサバサと大きな音を立てて消えて行きました。



登山道のそばにクマ 点線は登山道

下のクマに気を取られている間に2頭目のクマが近くで身を潜めていたのです。これには私もびっくりしました。登山道はクマも歩いている事をお分かりいただけたでしょうか。登山道は、動物と不意の遭遇を避けるためにもむやみに走らず、周囲の気配を感じながらゆっくり歩くのが安全です。

登山道整備の思い出

私は山頂から北部白山の登山道管理をさせて頂くようになってから今年で13年目を迎えます。

それより4年以上前からは白川郷の友人に誘われ三方岩岳から野谷荘司→妙法山→念仏尾根に至る北縦走路の草刈の手伝いをしていたので、足掛け17年ぐらい白山の登山道整備に関わっています。草刈は歩くスピードの6～8倍の時間が掛かります。1時間で歩く距離が一日仕事になるのです。一歩一歩ペースの上からない作業は日射、高温、雨、雷、虫刺されなどに悩まされ、まさに修行ではありますが、空気が爽やかで眺望の素晴らしい日などは、つくづくこの仕事をさせて頂いて良かったと感じる瞬間です。

中でも思い出に残るのは平成20年7月の出来事です。その日は午後を過ぎて中宮道の滝ヶ岳を過ぎた辺りで作業していました。遠くで雷の音がして、その音はどんどん近づいてくるような気配でした。雷雲はあつと言う間にやって来るもので、やがて頭の上で鳴り響きました。こうなればおちおち作業もしてられないので、一目散にゴマ平避難小屋に避難を始め、ずぶ濡れになりながら小屋に駆け込み一安心しました。その後雷は激しい落雷の音を伴い、雨脚は一向に弱まる気配がありません。小屋が吹っ飛びそうな激しい雷鳴の連続です。翌朝になっても止まない雨で、この日は一日作業をあきらめ小屋で横になっているしかありません。しかも相当な雨量で心配です。アマチュア無線機で誰か交信できないかメインチャンネルでコールすると、地元の愛好家がコールを受けてくれました。その交信で知ったのは浅野川の氾濫でした。

この他、白川村の北縦走路を手伝っていた頃、暗闇の念仏尾根で何時間も雷をやり過したり、清浄ヶ原でハイマツの中に身をひそめたり、昨年もやはり滝ヶ岳付近で激しい雷雨に襲われシナノキ平避難小屋に駆け込んだりしたことなど、何と言っても雷に関することが一番の恐怖体験として鮮やかに脳裏に蘇



雨に煙る中宮道滝ヶ岳付近のダケカンバ

ります。近年は特に雨の降り方も激しさを増したような気がします。

登山道整備の極意

北部エリアの登山道整備を続ける中で特に苦労しているのはササの侵攻による登山道の荒廃を食い止める事です。特にササ帯の中を貫く箇所では1年整備を怠れば、たちまちルートを見失うくらい繁茂します。例えば、北縦走路のゴマ平からシンノ谷の区間や中宮道のゴマ平の頭から三俣峠に至るトラバース区間などは毎年物凄い繁殖力で悩まされます。私が北部の各登山道整備に携わり始めた頃はこれ以外の至る所でもササは大変な繁殖力でたちまち藪こぎ道になっていました。

この10年で心がけて来た事は、そもそもササが侵攻してくる前に登山道脇に自生していた植物の力を借りてササの侵攻を食い止める事です。ササを刈ってやると地面に太陽光が届きますから、日陰で小さくなっていた在来種が大きく成長し花を咲かせるようになります。これに花の時期が終わった秋にも2度目のササ刈りを行い、翌春に雪解けと共に太陽光が地面を照らすように細工することで、ササよりも早く在来種の芽吹きを助けてやる事ができます。一気に北部の登山道全部を実施できないので、近年は重点区間を決めてあちこちでその距離を延ばして来ました。そのような中で最も成果が見えたのは奥長倉避難小屋から美女坂までの区間です。マイヅルソウ、ゴゼンタチバナのほか、イワハゼ（アカモノ）などのツツジ科の仲間がびっしりと復活してササの生える隙間を埋め尽くします。そこにニッコウキスゲやカライトソウなど季節の花々も加わり、登山道脇がかつての姿で花畑になって繋がっていきます。こうなれば毎年夏前に、その年に出てきたササの新芽だけを刈り倒して行けばよいので、作業自体も当初よりは随分労力をかけなくてもすみます。登山者も心穏やかな山歩きが楽しめるようになるし、何よりルートを見失って遭難するリスクも軽減されます。

こうやって北部エリアの登山道全体が花街道となってくれば良いと思って作業に当たっています。千年続いて来た道は、人が適度に関わる事で維持されます。周辺の植生にもよりますが、ササの繁殖力が強い所では1年も放置すると2年目以降、その回復には倍以上の時間が必要となりますのです。路は一日にして成らず、継続は力なりです。

人間は決して自然現象に立ち向かえませんし、むしろ温暖化により激しくしっぺ返しを喰らっているのかも知れません。自然と上手く付き合い、その力をうまく取り入れる事で自然との一体感を重んじ、自身の行為が自然を汚すことのないよう、日々白山に感謝の念を持って精進しなければならぬと思います。



北縦走路登山道の草刈り（作業前）



北縦走路登山道の草刈り（作業中）



北縦走路登山道の草刈り（作業後）

センターの動き(平成30年3月21日～平成30年6月30日)

3.27	オキナグサ保護計画検討会	(県庁)	5.26	白山外来植物除去作業ボランティア研修講座	(白山市)
3.28	サドクルマユリ報告会	(野々市市)	5.28	白山二県(石川県・岐阜県)合同山岳遭難防止対策連絡協議会	(白川村)
3.31	国際ワークショップ白峰2018	(白峰)	5.29	国際高等専門学校オープニングセレモニー	(瀬戸)
4.14	白山自然ガイドボランティア研修講座第1回	(白山市)	5.30	国際高等専門学校特別授業	(瀬戸)
4.20	白山自動車適正化連絡協議会総会	(本庁舎)	5.31	白山野々市鳥獣害防止対策協議会	(白山市)
	白山手取川ジオパーク推進協議会総会	(白山市)	6.1	白山麓別当谷安全協議会総会	(白山市)
4.25	白山ユネスコエコパーク協議会第18回幹事会第36回WG会議	(勝山市)	6.2	2018年度北信越支部雪氷学会	(富山県)
4.28	中宮展示館開館	(中宮)	6.3	白山まるごと体験教室「白山ろく生き物ウォッチング」	(市ノ瀬)
～5.6	楽しもう!白山麓 days		6.10	白山自然ガイドボランティア養成講座第2回	(市ノ瀬)
	「春の中宮紅葉 days」	(中宮)	6.14	白山自然保護調査研究会幹事会	(金沢市)
5.2	鳥越小学校オキナグサ授業	(白山市)	6.16	県民白山講座「白山登山と高山植物の集い」	(白山市)
5.7	ブナオ山観察舎閉館	(尾添)	6.19	能美市トミヨ保全対策連絡会	(白山市)
5.8	白山市官公庁連絡会	(白山市)	6.24	白山外来植物除去作業 in 市ノ瀬	(市ノ瀬)
5.9	石川県高等学校総合体育大会登山大会計画審査会	(県庁)	6.28	白山火山防災訓練	(市ノ瀬ほか)
5.19	白山自然ガイドボランティア養成講座第1回	(中宮)			

白山自然ガイドボランティア養成講座開催 -伝えよう!楽しさいっぱい、白山の自然-



白山自然保護センターでは当センターで実施する白山まるごと体験教室やガイドウォークなどの自然体験活動に携わっていただき、「白山自然ガイドボランティア」の養成講座を今年度開催しており、12名の方が受講しています。

3回の講座を通して、観察路沿いの動植物やガイドの仕方など白山の自然の知識やその伝え方を学んでいただいています。

第1回は5月19日に、第2回は6月10日に開催しました。

新たな皆さんの力を得て、今後も白山の自然の楽しさ、そして大切さを伝えていきます。

たより

本号では、当センターが、環境省と連携協力しながら管理運営をしている中宮展示館(中宮温泉ビジターセンター)と市ノ瀬ビジターセンターの周辺の自然並びに観察路について、その魅力を紹介しました。

両施設とも白山国立公園の集団施設地区に位置し、白山の自然や生活文化について展示紹介するとともに自然情報や登山情報を発信しています。

周辺には観察路があり、1～2時間程度の所要時間で手軽に白山の自然に触れることができます。市ノ瀬には健脚向きの長いコースもあります。

また、この観察路を案内するガイドウォークを開館期間中の土・日・祝日に無料で開催しています。今年度から新しく養成した方も加わった白山自然ガイドボランティアの皆さんが案内します。是非、皆様も遊びに来てください。

乾靖さんは、北部白山の登山道の維持管理に長らく携わっておられ、また白山登山ガイドとしても活躍されていらっしゃる方です。乾さんには、登山道整備やガイドなどの経験から、白山の登山道への思いを語っていただきました。(小川)

はくさん 第46巻 第1号(通巻183号)

発行日 2018年6月30日(年3回発行)
印刷所 前田印刷株式会社

編集・発行

石川県白山自然保護センター
〒920-2326 石川県白山市木滑ヌ4
TEL.076-255-5321 FAX.076-255-5323
URL <http://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/>
E-mail hakusan@pref.ishikawa.lg.jp